



Margareta Maria Alacoque
聖マルガリタ・マリア・アラコック
(フランス語読み：聖マルグリット・マリー・アラコック)

B.マルガリタ S.によるまとめ

わたしの大好きな聖人であり、霊名の聖人である聖マルガリタ・マリアについて、まとめました。参考文献は以下の通りです。

「み心の信心のすすめ」 「神の海 マルグリット・マリ伝記」 「聖火を点ずるもの」
「聖マルガリタ・マリア自叙伝」

1647年7月22日 フランス ブルゴーニュ地方で誕生

1690年10月17日 死去

列聖日 1920年5月13日 (教皇ベネディクト15世)

記念日 10月16日

ミオは「聖人とは特別なことをした人ではなく、カトリック信者として当たり前のことをした普通の人のことだ」ということを言っていたと思うのですが、ちょうど、わたしが読んだ聖人伝にも同じことが書かれていました。

「聖人とは、人がなし得ない事を達成した者のことではない。神がお望みのままに一人一人に与えられる恩寵に忠実に応えて、自分の中に神のみ業を完成した人が聖人である。平凡な日常生活を、信仰と愛とによって完全に行う人があったならば、そういう人こそ聖人で、神が大多数の人に求められるのは、このような聖なる徳に違いない。」

平凡な日常生活の中で、神が求めておられることを忠実に行うならば聖人になれるのです！

マルガリタ・マリア・アラコックも、もちろん神の愛に忠実に従いました。そして、「神秘家」と言われる彼女は、神さまが特別な権利をもって直接に靈魂を指導された聖人のひとりでした。

マルガリタの生まれた家は、父親が生存中は裕福な家庭であったようです。しかし、聖女が幼い時に父親が死に、家族の財産は叔母たちのものとなってしまいました。それ以来、残された母親も兄弟も、その親戚の厳しい監視下におかれました。

聖マルガリタ・マリアはミサに行くことを熱望しましたが、3人の叔母たちの全員の許可が下りないときは、行くことができませんでした。たとえ、許可が下りたとしても、教会へ着ていくような衣服もなく、帽子や衣類を誰かから借りなければいけなかったのです。また、食事もろくにもらえなかったようでした。

「村の貧しい人が彼女に同情して、こっそりと、ミルクや食べ物をくれた」と、自叙伝には、書かれています。

おそらく聖女は、普段から可能なときは、そのような村の人のために何かしてあげることも多かったのでしょう。村の貧しい人たちを集めて、今でいうなら教会学校のようなものも開いていたようです。そのお礼なのでしょうか、貧しい人が彼女のために、食べ物をもってきてくれたのです。

しかし、家では、叔母たちが容赦なく罵声をあびせてきます。そのような仕打ちに耐えられず、庭の隅の秘密の隠れ家に逃げ込み、食事もとらず、一日中、聖母にお取り次ぎの祈りをして過ごすこともありました。そんな一日を過ごして帰ると、さらにひどい仕打ちが待っており、弁解もさせてもらえず、使用人と一緒に働かされました。

聖女は、子ども時代のこのような苦しみを通して、十字架の苦しみを生きる恵みを教えられたのです。

自分の十字架のイエスの御足の上に涙を落としながら、彼女は一晩中泣いたこともありました。そのとき、イエスおん自らマルガリタに教えられました。そのことは、自叙伝にこのように書かれています。

「この十字架の主は、わたしの心の絶対の主でありたいと望まれ、またその苦しみの御生涯に同化させたいというお望みでした。そのことを、わたしは簡単には理解できなかったのですが、それでも、主はそれをお見せになりました。」

これは、イエスが耐えられたご受難と同じ苦しみを聖女に耐えさせるためでした。

そして、ついに彼女は、「十字架につけられたイエスの真の写し、イエスの完全な代理になるということ以外に、強い望みを持たなくなりました」と言っています。

1671年6月20日 マルガリタは聖マリ訪問会に入りました。

彼女の親戚や兄は、ウルスラ会の修道院に入ることを望んでいました。しかし、マルガリタは、そこはよく知っている従姉妹が入っていたので、修道院に入る以上、誰も知っている人がいないところを望んだのです。

それに、マルガリタが聖マリ訪問会を初めて訪れたとき、イエスが、「**ここは、わたしがあなたに望む場所である**」と言われるのを聞いたのです。ですから、彼女は、兄がなんと言おうと一歩も譲らず、聖マリ訪問会に入ると主張しました。

着衣式の後のことをマルガリタは、このように書いています。

「この会の聖なる修道服を着てしまうと、わたしの神なる『師』は、二人の婚約の時となったのだ、と、わたしにわからせてくださった。（中略）それから、最も情熱的な愛人同士のように、彼の愛の交歓の、甘美なうちにあるもっとも甘美なものだけを、この婚約期の間わたしに味わわせてくださる、と理解させてくださった。この交歓は、実際、大変過度なものだったので、しばしばわたしに我を忘れさせ、行動できないようにした」

おそらく彼女の行動は、まわりの修道女には大変奇異に映ったことでしょう。修練長からは、マルガリタは精神のバランスを崩しているとさえ思われていました。ですから彼女は、大変な努力をして自分のすべきことを忠実に行おうとするのですが、そのような努力はすべて無駄に終わりました。

あるとき、イエスは「あなたの『仲間』が犯した罪の償いとして、あなたの身を捧げなさい」と言われます。

当時の修道院長は、このことを修道女たちの前で公表するように言いました。決死の覚悟で、そのように皆の前で言うと、マルガリタは狂人だと言われ、悪魔がとりついていると言って聖水を浴びせかけられ、あらゆる場所にひきずって行かれました。マルガリタは抵抗することもできませんでした。

彼女は、修道院という自分の共同体から拒絶され、侮辱され、虐待されて、本当にイエスと一致する経験をしました。

そういうことがあったのち、1673年12月27日、聖ヨハネの祝日に最初の「大きなご出現」を受けます。



イエスは、聖なる心をマルガリタにお示しになり、言われます。

「わたしの神なる心は、人間に対する愛、特にあなたに対する愛で満ち溢れている。わたしの心があなたを通して人々に知らされ、あなたが見ているその宝で、…人々を破滅の淵から救うための恵みを持つその宝で…人々が豊かにされることを望み、わたしの心から炎が燃え上っている。わたしのこの計画のためにあなたを、それに価しない無知なあなたを、わたしは選んだ。そうすれば、これがわたしの業であることが明らかになるからだ。だから、あなたの心をわたしに与えなさい！」

み心が広がることを神は望んでおられるのです！

二回目の大きなご出現では、第一金曜日の聖体拝領、木曜日夜11時から12時までの聖時間の祈りなどを具体的に命じられました。

「わたしはあなたの力となる。何も恐れないように。けれどもわたしの声に注意深くありなさい。わたしの計画の遂行をする覚悟を持つよう要求していることに注意を払いなさい。第一に、従順がそれを許すなら、あなたは聖なる秘跡の中にいる私を拝領するように。そしてあなたに与えられるはずの自己放棄、あるいは屈辱を受けるように。これらは、わたしの愛の担保として、あなたが受け取らなくてはならないものなのだ。そしてさらに、毎月の最初の金曜日に聖体拝領をするように。

木曜日から金曜日にかけての毎夜、わたしがオリーブの園で感じた耐え難い死の悲しみに、あなたを与らせよう。

この悲しみは、それを沈めることができない上、あなたを死よりも一層過酷な、一種の断末魔の苦しみに追いやるだろう。私
がその断末魔の苦しみの時に、私の御父へ申し出た謙虚な祈りに同伴するため、あなたは、十一時と真夜中の間の一時間、私と一緒にひれ伏すために起きるように。（中略）



けれども聞きなさい、私の娘よ。

霊であればなんでも気軽に信じるようなことはしないように気をつけなさい。そして、それらを頼りにしないように。

なぜなら、サタンは、あなたをだまそうと狂ったようになって
いるからだ。これが、従順の権威をもってあなたを導く人たちの承認なしに、あなたは何もしてはならないことの原因なのだ。

これを守るなら、サタンはあなたを陥れることができない。なぜなら、サタンは従順な人達の上に何の力も持っていないからだ。」

イエスは、ご自身がマルガリタに伝えた言葉を長上に報告するように、そして、長上の言葉に従順に従いなさいと言われていました。このことから、「従順」がどれほど大切なことかわかります。

神さまの聖心が世の中に伝わるために、神さまは、マルガリタのそばに、将来聖人となる司祭を用意されました。

マルガリタのいた修道院はパレ・ル・モニアルというところにありました。そこには、イエズス会の修道院があり、そこに修院長として派遣されてきたのが、クロード・ド・ラ・コロンビエール神父でした。マルガリタがコロンビエール神父を初めて見たとき、神さまは彼女の心に「これが、わたしがあなたに送る人だ」と言われたのです。

のちに聖クロード・ド・ラ・コロンビエールとなるこの神父は、マルガリタと同じ感性をもち、彼女のことを大変よく理解しました。修道女たちの聴罪司祭となり、マルガリタからたびたびイエスのメッセージを聴くことになりました。

マルガリタの修院長がコロンビエール神父にマルガリタの名前を告げた時、神父は、「あれは恵みを受けている魂だ」と言ったということです。

何かと他の修道女からの攻撃にあい、また精神のバランスを崩しているようにもみえるので、マルガリタの内では起こっていることについて確信を得るために、修院長は、神父に彼女の霊的体験を話すように、とマルガリタに命令しました。

神さまは「み心」については、他にもたくさんの人に出現され、伝えてられていると思いますが、聖マルガリタ・マリアの場合、聖コロンビエール神父と出会うことによって、み心の信心が世の中に広がることとなりました。

神父はその後、イギリスへ赴任していきませんが、英国王に対する謀反に加担した罪に問われ、国外追放となり、フランスへ戻ることになりました。しかし、体調を崩し、自力では歩けないほどとなって、パレ・ル・モニアルに戻ってきました。ほどなく、神父は、天に召されます。

「ラ・コロンビエール神父の靈的黙想」という本が彼の死後出版されました。この本は、「み心の信心」を普及させる大変大きな役割を持ちました。

マルガリタは、その後、修練長となりました。若い靈魂を育てるために、神さまはマルガリタにその役割を与えられたのでしょうか。彼女は、修練女たちから、とても慕われ、また修練長としても素晴らしい資質があったそうです。

亡くなる前、マルガリタは、看病をする修練女たちに、自分が司祭の命令により書いた靈的記録をすべて焼き捨てるように頼みました。しかし、それがどれほど重要な意味があるものか知っている彼女たちは、そのことについては、修道院長に一任してほしいと懇願しました。

そのおかげで、わたしたちは、今も聖マルガリタ・マリア・アラコックの自叙伝を読むことができます。

B. マルガリタ S

み心の祭日



1675年6月19日、ご聖体の祝日のオクターブ中（祝日後から8日間の間のこと）に、イエスはご聖櫃の前に跪くマルガリタにご出現され、み心をお示しになり言われました。

「人間をこの上なく愛するこの心を見なさい。人々にわたしの愛を証明するために捧げ尽くし、与え尽くすことを何一つ惜しまなかったわたしの心を。その見返りとしてわたしが受けたのは、人々の冷淡さ、不敬、侮辱、愛の秘蹟に対する冒瀆であった。しかし、わたしを最も苦しめるのは、わたしに特別に奉獻された靈魂たちが、そのような態度でわたしに接することである。

だから、わたしはあなたに次のことを求めるのだ。

聖体の祝日の次の週の最初の金曜日を、わたしの聖なる心を崇敬する特別な日と定めなさい。その日には、祭壇の上に現存して以来わたしが受け続けた侮辱を償うために、罪人たちの代わりに厳粛に聖体を拝領しなさい。

わたしの心を崇敬する人々と、この信心を広める人々に、わたしの愛の影響を最も豊かな形で感じさせることを約束しよう。」

1856年5月18日、フランスの司教の要請により、教皇ピオ9世はこの祭日を全教会で祝うことをお決めになりました。



**主イエス キリストが、神なる聖心の信心を行う人々に、
聖マルガリタ マリア アラコックを通して伝えられた言葉。**

1. 「世の人々は、この素晴らしい信心によって、それぞれが必要とするあらゆる助けを見いだすだろう。」
2. 「わたしは彼らの家庭に平和を与える。」 「わたしは離れ離れの家族に一致をもたらす。」
3. 「窮地にある時、慰めを与える。」
4. 「彼らはこの聖なる心の中に、生きる上での避難所を見つけるだろう。特に死を迎える時に。」 「この聖なる心の信心を絶えることなく続けてきた者が迎える死は、なんと甘美なことか。」 「この聖なる心を崇拝する者は、決して失われることはない。」
5. 「彼らのすべての活動の上に祝福が注がれる。」 「彼らのすべての仕事は守られる。」
6. 「わたしは、この神なる心が、慈しみと恵みが尽きることなく溢れ出る泉となることを望んでいる…、あまりにもたくさん行われた罪に対する神の正義の怒りをなだめるために…、神は、この聖なる心に帯びる愛によって、罪人を赦される。聖なる心は、神の正義から免れようと、そこに避難するすべての哀れな罪人にとっての 堅固で安全な避難所である。」 「慈しみを獲得するために、この聖なる心は全能である。」 「聖なる心は、愛の王国を築くために、破滅の道から大勢の人々を引き戻したいのだ。」
7. 「主は私(マルガリタ) に次のように約束されました…。主のみ心を崇拝し、自分自身を特別にみ心のご保護に委ねるすべての共同体の上に、主の特別な愛による甘美な塗油をしてくださると。彼らが生ぬるくなった時には、彼らに再び熱意を持たせるために、主は、神なる正義の懲罰を遠ざけられます。」

8. 「わたし（マルガリタ）は、このように短時間のうちに、霊魂が最も完全な高みに上げられる他の信心を知りません。」（完徳の約束）
9. 「私（マルガリタ）の救い主は、霊魂の救いのために働き、その賜物が与えられている人は、もっとも頑なな心に触れることができるのだ、ということを理解させてくださいました。たとえ、主の聖なるみ心に愛情のこもった祈りを捧げるのが彼らだけだとしても、素晴らしい成果をもたらすのです。」
10. 「すべての祝福の源である聖なる心は、この聖なる心の絵が愛され崇敬されて飾られているあらゆる場所に恵みを注ごう。」
11. 「主は私（マルガリタ）に、み心に書き記されている大勢の人たちの名前をお見せになりました。彼らは主が讃えられることを望み、心を尽くして信心を広めている人たちで、彼らの名が消されることはありません。」
「主は、すべての栄誉、愛、賛美を主に帰するために、自分自身を主に奉献する人々に与えられる主の愛と恵みの素晴らしさを、私（マルガリタ）に打ち明けられました。」
12. 「わたしの溢れるばかりの慈しみによって、あなたに約束しよう。わたしの全能の愛は、9ヶ月にわたり最初の金曜日に聖体を拝領した者が死を迎える時、彼らに痛悔の恵みを与えよう。彼らは、わたしに拒否されたり秘蹟なしに死ぬことはなく、最後の時にはわたしの心が彼らの安全な避難所となるだろう。」（初金の信心）